

## 生 命

六年 H・W

私たち六年生は、今家庭科の授業で保育の勉強をしています。先日、その一環として、絵本の読み聞かせの授業がありました。各自小さい頃のお気に入りのお絵本を持参するようにと、先生から伝えられ、私は迷うことなく、昔から大好きなある一冊の絵本を手にとっていました。

その絵本は、一人の少年とその少年の飼い犬の話です。

彼らは一緒に育ち大きくなっていきます。少年は犬に、心のありったけでいつも愛を伝えてあげます。しかし、やがて犬は年をとり、少年よりも先に死んでしまいます。その時少年は、深い悲しみを感じながらも愛を伝えていた分、いくらか楽に犬の死を受け入れることができるのです。

私の家では、ずっと猫を飼っています。ですから、私は幼い頃から猫と触れ合い、一緒に育ってきました。今も二匹の猫を飼っています。居てくれるだけで癒しとなり、家族の雰囲気や和やかにしてくれる大切な存在です。一緒に遊んだり、触れ合ったりすることは私の心を穏やかにしてくれます。けれども、もちろん可愛い時ばかりではありません。忙しいのにしつこくエサをねだってくることもあるし、大切にしている食器を割ることも度々起こります。また私が一番恐れているのは、靴や鞆に排泄をされてしまうことで、こういった時は、正直許せないと思ってしまうこともあります。けれどもそのような時には、動物がこうしてしまうことは仕方が無いことだと自分に言い聞かせ、必要以上に怒らないようにと心がけ、怒りを鎮めています。動物というものは、赤ちゃんの時が特に可愛いです。年を取ってくると、毛にツヤがなくなり、目やにが出てきて、もしかしたら歯周病で口が臭くなることだって考えられます。でも、年を取ってヨボヨボでも子猫で可愛い時でも変わらず可愛がってあげなくては いけません。飼い猫には、家という世界しかないのだから、飼い主の都合でかまっていけないというのはいけません。

先程紹介した絵本では、主人公の少年は飼い犬がどんな悪さをして、年を取っても、変わることなく毎晩毎晩、「ずっと大好きだよ」と言ってあげます。絵本では、ごく自然に、当たり前のように描かれているこの行動が、どんなに特別なことであるか、幼い頃から動物が身近な存在だった分、私には、変わらない愛を持ち続け伝えることの難しさや大切さが、理屈抜きでよく分かるのだ

と思います。

そして、ふと思うのです。このように、日々可愛がられて、見届けられていく動物は、果たしてどれくらいいるのだろうか。保健所では、毎日動物たちが殺処分されているという現状があることを私たちは知っています。いったい一年間に何匹の動物達が保健所で殺処分されているのでしょうか。昨年度は、全国で、犬二万八五七〇匹、猫九万九六七一匹がその対象になりました。東京ドームの最大収容人数が五万五〇〇〇人ですから、人間で言うと東京ドームに人間を三回收容してやっと処分しきれるといったところでしょう。これでも年々、殺処分の数は減少しているのだそうです。果たして、こんな事があっていいのだろうかと痛切に感じます。犬の写真や詳細と共に、処分される日までの期限を見ること出来るサイトがあります。それを見ていると、そこにいる一匹一匹にそれまで生きてきた命があって、私達はそれを人間の都合で殺していくのだと思わずにはいられません。そして、怒りや寂しさを感じると同時に、このことへの責任を強く感じるのです。そして、人間はどこまでも残虐になれ、自己中心的にものを考え、行動することができてしまう生き物だと思うのです。しかし、このように非難してばかりでは何も現実が変わりません。だから私は、今改めて、私たちが自分以外のものに思いを馳せることができること、そのような力を持つ「人間」に生まれてきたことの意味を考えなくてはいけないと思います。

家庭で飼われている動物の他にも、私たちが目を向けなくてはいけない問題が、数多く世の中には存在します。最近注目を浴びた事件では、アメリカの、ジョージア州で起きた洪水で、動物園の動物が逃げ出してしまう、一部の動物が射殺されるという出来事がありました。日本でも、和歌山県で行われる鯨やイルカの追い込み漁が問題になっています。その漁の残酷性が着目され、問題視される一方で、その漁のやり方が、代々、その土地に生きてきた人たちの、文化や生活を支えてきたのだという現実があるとするなら、これは複雑な問題です。「追い込み漁」をどのような立場で考えるかによって、同じ一つの事柄も、全く違った問題を抱えているように見えます。それぞれ自分の立場だけで、自分が正しいのだと主張していても、単に相手を傷つけ、非難するだけで、相互のためになるような、真の問題解決にはつながっていきません。

考えてみれば、日々の私達の食卓だって動物の命を奪って成立しているのです。鯨やイルカは可哀想で、豚や鳥や牛や魚なら良いのでしょうか。そんなこ

とはない、どんな動物も、また人間も、それぞれ同じ重さを持つ、かけがえない「命」であると思うのです。しかしこう述べる私の昨日の夕食もまた、牛の犠牲の上に成り立つ焼肉でした。目の前に出された時には、もうすでにただの肉の魂となっていて、それが、どんな牛のどこの部位かも、また、その牛がどのように育ったのかも分からずに食べています。もし、自分自身の手で牛を殺して食べなくてはいけないとしたら、私は食べるができなかったでしょう。それなのに、誰かの手で殺された原形が分からない状態であれば、それに対して、残酷だとも思わずに、平然と食べる事が出来るのです。そして、私達が生きるために犠牲になった「命」に、思いを馳せることもなく、平気で食べ、残すことさえも厭わないのです。しかし、世界中の人がベジタリアンにならない限り、私たちにとって動物の命を奪い、それを食べることは避けられません。私は肉を食べることを否定しているのではありません。ただ、そこに、犠牲になった命があることを覚え、その一つ一つの命を意識し、向き合うことは、今この瞬間からでも出来ることだと思います。一つ一つの命に、感謝することが大切なのです。たとえ同じ結果であっても、自覚を持って、どう向き合うかが大切なのです。何も考えず食べ、まずいから、お腹が一杯だからといって残すのではなく、食べるものの「生命」を感じ美味しく頂くことこそが、命を奪う立場にいる私たちに求められる愛であり、償いだと思えます。どんなものにも、一つ一つの命があり、それを大切にしないといけないということは、当たり前すぎて、言われなくても分かっていると、皆さんは思うでしょう。けれども、常にそのことを心に留めて生活している人は、どのくらい居るでしょうか。人間であっても動物であっても、他者から自分の存在を認められ関心を持たれることが、その人やその動物をそのものらしく生き生きと育てるのです。つまり、生き物は皆、他者からの愛を必要としているのです。

この絵本は、子ども向けに書かれた作品ですが、私達が生きていく上で、決して忘れてはならない大切なことを、訴えているように思います。主人公の少年が、自分の犬に思いを伝え続けたように、身近なものにも、そして自分とは関係ないように思えるものにも、愛と関心を向けられる人になりたいです。

絵本というのは、幼い子どもが、何の先入観もなしに、繰り返し、繰り返し読むものですが、子どもの視線で、命を慈しむこと、そのためには自ら働きかける必要があることを教えてくれるこの本を、私はいつまでも大切にしていきたいです。